



「炭化線文壺」高さ41cm、径41cm



「炭化片口」高さ11cm、10×15cm



「炭化皿」高さ2.5cm、径21cm



湘南の新窯元
◇ 2

独自の構造のガス窯を製造しながら創作活動を行っている馬場芳道氏72歳



「炭化化粧茶碗」高さ7.5cm、径12.5cm



「炭化象嵌どんぶり」高さ9.5cm、径18cm



400×450mmの棚板2枚敷きのガス窯は、6本のバーナーで焚く

陶房芳乃和・天芳窯
馬場芳道さん
自作の炭化窯で焼く

平塚で陶芸教室を主宰しながら陶芸に励む馬場芳道氏は、本格的で独創的な陶芸窯を製作する築窯師としても知られる。「光を吸収する」黒肌の陶器を焼くために考え出したのが、通常より3倍も広くした煙道に還元材を投入して強還元や炭化焼成を行うというもの。そこで焼いた会員や馬場氏の作品が、高い評価を受けている。



「炭化珈琲ポット」高さ14cm、9×18cm
「炭化珈琲ドリッパー」高さ9cm、11.5×14cm
*「珈琲が酸化しにくくなり、一晩おいても味が劣化しないようです」

- PROFILE
- 1945年 岩手県に生まれる
 - 1977年 陶芸クラブ・有雅陶で陶芸を始める
 - 1979・80・2005年 神奈川県展入選
 - 1994年 長野県南牧村に窯を築く
 - 2005年 平塚市展大賞
 - 2006年 全陶展入選
 - 2007年 日本陶芸展入選
 - 2008年 全陶展会友優秀賞
 - 2009年 東京陶芸展北区長賞
 - 2010年 全陶展東京都知事賞
 - 2011年 平塚市展審査員
 - 2012年 全陶展理事
 - 2013年 全陶展評議委員
 - 2015年 全陶展審査員



湘南の新窯元

炉内の高さは700mm。目安とする焼成時間は前者が24〜26時間。後者は14〜16時間で、場合によっては数時間延長して焚く。小さな穴が目立つ窯材のレンガは多治見から取り寄せたもので、サイズが65×115×230mmの「耐火断熱レンガ」。馬場氏が製作しているような中・小型の窯では通常、壁に対してレンガを横に並べて壁厚を115mmにすることが

多いが、馬場氏はレンガを縦に並べて壁厚を230mmにしている。壁を厚くして窯がゆっくりと冷めるようにしているのが馬場氏のガス窯の特徴の一つになっているが、馬場氏はさらに酸化だけでなく強還元から炭化までできる市販の窯とは異なる仕掛けを組み込んだ。



色見穴からススが出た炭化焼成を終えたばかりのガス窯



窯の真後ろにあるドラフト。ここからもみ殻や薪を投入するのが馬場流の炭化焼成法



窯に使用している軽量の耐火断熱レンガ



月に2週間ほど開かれている陶芸教室。開講スケジュールは「陶房芳乃和」で検索を



炉内に残った炭は畑にまいて野菜の肥料にすることもある

独自の炭化焼成ができるつくり
馬場氏が初めてガス窯を製作したのは、灯油窯を製作してから10年経った1987年頃のこと。94年には十数人の陶芸仲間と長野・南牧村に窯窯を築窯し、1回に1000束の薪による135時間にも及ぶ窯焼成を年に2回ほどのペースで行なうようになった。それらの焼成をとおして馬場氏が一貫して追及してきたのが、光を吸収するような「黒い焼き肌」。それは、灰釉を掛けて強還元したり、炭化焼成したりすることによって可能になるが、初めて製作したガス窯による炭化焼成では、何度焚いても納得できる焼き上がりにはならならず、手探りの状態が続いた。

5年の試行錯誤の結果馬場氏が出した結論は、煙道の根本に通常の3倍ほどのスペースを設け、そこにドラフトから薪やもみ殻を投入することだ。

「もみ殻を中心とした還元材は、燃え具合を見ながら投入を繰り返して900度まで落としますが、それ以後は還元材を投入しても効果はないようです。」

煙道の根本が今までの3倍ほどという独自のガス窯は、その性能と使いやすさから頼まれて製作したガス窯はこれまで十数基。陶房芳乃和では、そのガス窯の焼成指導を含む貸し出しも行っており、近隣から定期的に陶芸愛好家も多い。



焼成室で釉掛けなどのアドバイスをする。陶房芳乃和の会員は36人ほどで、その内20人近くが全陶展などで入選している

本格的なガス窯を自ら製作
馬場芳道氏は、岩手県の八幡平に生まれた。のどかな風土に育まれながらのびのびと育ったことがモノ作りを好きになる基になり、上京して家具メーカーに就職。一方馬場氏は、すでに上京していた兄が平塚で立ち上げた馬場工業で、鉄、ステンレス、アルミ、チタンなどの高度な溶接と製缶技術を習得。それが偶然にも陶芸に結び付き、会社の隅に自作窯をすえることとなった。

土と炎に魅せられた馬場氏は7年、陶芸の世界に飛び込み、2年後に自分で作った灯油窯で焼いた作品が神奈川県展に初入選し、30年ほど前からは冒頭で紹介した中型や小型のガス窯も自ら作り始め、現在に至っている。

馬場氏が主宰する陶房芳乃和は、東海道線平塚駅から北西に車で10

分ほどの住宅街にある。すぐ近くに東海道新幹線が通る工房は、築90年以上の民家を陶芸教室及び展示室を兼ねた工房、焼成室、それに原材料を補充する小屋の3棟からなる。いずれも使いやすいように馬場氏が改造したもので、釉掛けも行う焼成室には、自ら製作した窯を含めた3台のガス窯がある。

ドラフトから還元材を投入する
馬場氏が製作した窯は、冒頭に掲載した扉の開いた窯とその奥に半分ほど見える黒いススの付いた窯の2基。兄の工場で培った金属加工及び溶接技術を駆使したガス窯は、右端の市販のものと見分けがつかないほど本格的な仕上がりになっている。

左の窯は400×450mmの棚板2枚敷きで、炉内の高さは850mm。中央奥のすすけた窯は460×500mmの棚板1枚敷きで、



「素地の中まで炭化される信楽の赤粗土をおもに使っています」